

□ 次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

文化という言葉をも、そんなにこむずかしく考えることはないのだ。私がここで言っている文化は、それぞれの国や民族にとっての、生活習慣の規範というほどの意味である。そういう生活習慣の規範が民族ごとに守られているというのは、美しいことだ、と言っているのだ。文化を、生活習慣の美と言いかえてもいい。

日本では、正式な場では正座するというのが生活習慣上の美である。私などは足が軟弱で、お葬式のお経の時ですら、一分もするともう限界です、ごめんなさい、とばかりに足を崩してしまうのだが、文化が守られていないのであり、恥ずかしく思う。そういう時に、喪服を着たお婆さんなどが、腰高にならないうでこぢんまりと正座し、セスジがすつと伸びている姿を見ると、ああ美しいなと思う。その姿は日本の文化の中にあるものだからだ。もちろん、日本文化だけが美なのではない。韓国のお婆さんは、片膝を立ててあぐらをかいてすわってこそ美しいのだ。その地の人はその地の文化の中にいなくちゃいけない。我々は、自分でも気がついていないようなところで文化のくくりの中に生きている。日本人として知らず知らず守ってしまっていることが、ちゃんとあるのだ。そういうことがだんだんなくなっていくのは、文化の崩れである。

二十年前くらい前にテレビの中で、ある評論家の言ったことを聞いて、ああそうか、とbナットクしたことがある。私たちは半ば無意識のうち私たちが文化の中に生きている、ということの一例を、その人がズバリと指摘したのだ。

女子の長距離走(マラソンか、一万メートル走かだった)のゴールのシーンをカメラが映し出していた。そして、ありったけの力をふりしぼってゴールした日本人選手は、ゴールしたとたん、ヨレヨレになって崩れ落ちるか、誰かに肩を支えられてようやく歩けるといふうだった。肩を支えられて走っていても、今にもぶつ倒れそうである。

A 外国人選手はそういう様子ではないのだ。その人も全力を出しきって走ったのだらうに、軽く体をほぐすための走りをして、屈伸運動をしたりしている。いい走りだったと、シユクフクされれば笑顔で応じたりしている。

B 日本人は、表情を作る余力もなく、失神寸前という様子なのである。それは成績には関係ない。一着だったとしても、残念なことにビリだったとしても、同様に、ぶつ倒れそうなのである。

それを見て、その評論家(スポーツ評論家ではなく、社会評論家)はこう言った。

「あんなふうには、日本人選手がフラフラの様子を見せるのは、それが日本の文化だからなんです」

そう言われてすぐにはナットクできなかった。あれは別に演技でやっていることじゃないだろう、と思ったのだ。そんな計算ずくのものでなく、本当に、疲れてぶつ倒れる寸前まで頑張ったので、ゴールしたらもうヨレヨレなんだろうと。

C 同様の事例を何回も見ているうちに、私にもだんだんその人の言ったことが当っているように思えてきた。欧米人は体が大きくて基礎身体能力が高いのに対して、小柄な日本人はありったけの体力を使い切るからあなる、と考えたこともあるのだが、体格が日本人とそう変わらないアジアの国々の選手も、日本人のように倒れ込まないのだ。

日本人選手だけが、医者を呼べ、と言いたくなるほどにヨレヨレになる。日本人の運動能力がよほど低いのかと考えたところだが、それにしても成績はそう悪くはないのである。決してビリではなく、一着とか二着だったとしても、立っていられないくらいにグロッキー状態なのだ。

D 日本人がスポーツマンに何を求めるのか、という文化の中から、あのフラフラ状態というのは出てくるのだらう。日本人はスポーツに、死ぬほど頑張る、その精神力のおかげでいい成績をあげる、という物語を求めるのだ。選手たちももちろん、そういう精

神力神話の信奉者である。彼らは心から、気力で闘い抜きます、と思っているのだ。

そうすると、走り終えた時、作爲でも演技でもなく、気力を出し切った姿になってしまうのだ。だからゴールするともう、立っていることもできないのである。

そういうことに、無意識のうちに文化の美が原因しているのだ。だからあれは、韓国の人が身内の人の死にゴウキユウするのと同様のものなのである。韓国人は決して、うそなきをしているのではない。悲しみが大きければ大きいほど、大きな声でなくはずだ、という文化の中にあるから自然にあなるのだ。

そして日本人は、気力で頑張りぬいて勝つ、ということを尊ぶ文化の中にいるから、決して計算してそうするのではないが、ヨレヨレになるのだ。

我々はそんなふうには、文化の美に左右されて生活している。

(清水 義範 「行儀よくしろ。」)

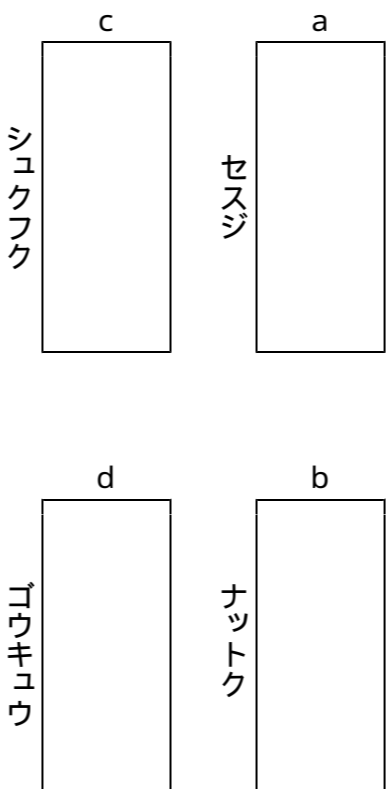
規範：手本、基準。

グロッキー：疲れてフラフラの状態。

信奉者：ある考えを最高のものと信じて従つ者。

作爲：手を加えること。

問1 線a～dのカタカナを漢字に直しなさい。



問2 A D に入ることはのうち、逆接の働きでないものを二つ選び、A～Dの記号で答えなさい。

□

問3 「」がついている段落の内容は、どのようなことをわかりやすく説明するための具体例ですか。本文中から三十字程度で抜き出しなさい。

問4 線「無意識のうちに」とありますが、これと同じような意味を表すことばを、本文中から抜き出しなさい。

□

問5 一線 「同様の事例」とありますが、どのようなことを指していますか。本文中の**ことば**を使って答えなさい。

問6 一線 「その人の言ったことが当たっているように思えてきた」とありますが、そう「思えてきた」理由を二つ、本文中の**ことば**を使って答えなさい。

問7 一線 「日本人がスポーツマンに何を求めるのか」とありますが、「日本人」は「何を求め」ているのですか。本文中から十七字で抜き出しなさい。

問8 本文の内容として正しいものを次のア～エからすべて選び、記号で答えなさい。

ア 文化の美を常に意識する日本では、精神力神話が広まっている。
 イ 人は、無意識のうちに分人たちの文化の中で生活している。
 ウ 日本人は、身体能力でアジアの国々の選手に優っている。
 エ 生活習慣の美が守られなくなっていくのは文化の崩れである。

二 次の文を読んで、あとの問いに答えなさい。解答に字数の指定がある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(設問の都合上、原文の表記を一部改めたところがあります。)

次の文は、昭和初期が舞台の作品である。ある夏の夜、小学生の「私」と二歳年上の姉は、海辺で上映される映画を見に行った。映画が始まるまでの間、浜辺に並んだ店々を見に行き、人だかりがあるポット口屋に目がとまる。景品の西瓜に人が集まり、次々にポット口落としに挑戦している。

次に登場したのは、長身のスポーツマン・タイプの青年であった。彼は箱に入ったボールを一つ手に取ると、それを掌でもてあそびながらおもむろに伸びをした。いかにも自信ありげで、その頭髪は油でてらてら光っていた。私はすでに何かしら敵が心を抱いて、彼が投げるのを眺めていた。確かにすごい速球であった。最初のボールからピラミッドのご真ん中に命中した。ほとんどのポット口が飛び散った。しかし、ポット口落としにかけてはいささか専門家と自負していた私はひやりとしただけだった。なぜなら左に一個、右に二個のポット口がなお残っていたからである。たとえ五個が残っても、そ

れが一カ所にかたまっていれば全部を落とすことよりも容易なのだ。果たして青年は二球目以後は右の一個を落としただけにとどまった。すると、向こう側から声がかかった。
 「おいヤッさん、しつかりしろや。それでも チームの投手なのか」というような声だ。

やはりその青年は、むろん草野球であろうが、とにかく大人のチームの投手だったのだ。
 彼は今度は真剣になつてうなずいた。だが、彼はいたずらに速球を投げることにのみ集中した。あたかも快速球を観客たちに誇示するかのよう。しかし、初球はともかく、ポット口落としには何よりもコントロールが必要なのだ。それゆえ颯爽と登場したいわば本職の青年も、二回目は同じく二個、三回目は五個も木台の上に残してしまふ結果に終わった。

彼はそれ以上恥をかきたくなかつたのであろう、
 「ボール三つじゃ、とても無理でござんす」と言つて、肥つた親父さんから小さなキヤラメルキャラメルの箱をもらつて引き下がってしまった。

何とかチームの投手と呼ばれた青年もみじめに敗退したので、一時、客が途絶えた。
 そのときである。いつの間にか私のそばに来ていたおしゃまな姉が、「宋ちゃん、やつてごらんさいよ」と、うながした。

恥ずかしがり屋であつた私が、どうしてこうした晴れの舞台に登場する気になつたのかは、今思い返してみても分からない。おそらくポット口落としなら、今し方の青年よりはよい成績が残せると信じたからであろう。
 私と姉は、その夜のために、母から十銭ずつ小遣いを与えられていた。果たして正確であるかどうか分からぬが、それが穴の開いた白銅貨であつたように覚えている。

ともあれ、私は進みでたのだ。何とかチームの投手という青年のあとだけに、小さな私の登壇は意外に思われたのであろう。
 「小僧、がんばれ」というような声を確かに私は聞いた。

そして、今の私なら大活字にして書きたいことに、その小僧の腕前はどうだつたらう！一回目こそ失敗したが、二回目、もの見事に私はポット口をすべてぶち倒してしまつたのだ。そのときは、二、三人の人が拍手をしたと思う。
 私は十銭しか持つていなかつたから、これで終わりだと思つていて、姉が駆け寄つてきて、無言で貨幣を手渡してくれた。

そのため、もう二度挑戦することができた。そして、四回目、自分でも信じられぬことに、またもやすべてのポット口を落とすことに成功したのだ。最後の一球のとき、台の上にはポット口がただ一つ残つていた。私はボールを投げるといふより、そこまで糸を張つて、その糸の上をそつとボールを送つてやつたといふほうが当たつていたのであろう。

でぶでぶ肥つた親父さんが、それでも笑いながら西瓜を二個手渡してくれた。その西瓜はそれほど大きくはなく、まあ中くらいのものであつたらう。けれども両腕でかかえても一人では持ち切れなかつた。人垣のところまで来て、私はその一つを落つこととしてしまつた。

私は姉を呼んだ。ところが、姉はやつてこなかつた。きつと弟があまりに破天荒なあつぱればな業を成し上げたので、恥ずかしくなつてしまつたのだらう。私は落ちた西瓜を辛うじて拾いあげ、二つの西瓜をかかえてほとんどよちよちした足取りでその場を離れた。得意満面という気持ちはそのときおそらくなかつたと思う。何よりも二つの西瓜を落とさないことで必死であつたのだ。

だがその私の退場の姿に対し、はつきりと覚えているが、その場にいた見物人の間から一斉に拍手が湧き起こつたのだ。それも当然であろう、大人の投手ですら成し上げられなかつた奇跡に近い成果を、ひよつ子の少年が成し上げたのだから。ああ、今になって思い返してみても、あのような栄誉と栄光に包まれた人生最高の日はまたとないのではあるまいか。

ポット口落とし…ポット口と呼ばれる木の筒にボールをぶつけて落とす遊び。全部落とすと商品がもらえる。

敵がい心…敵を倒そうとする強い気持ち。

自負…自分に自信を持つこと。

誇示…誇らしげに見せびらかすこと。

破天荒…今まで誰もしなかったことを初めて行うこと。

問1 一線 「おもむろに」の意味として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 急に
- イ ゆっくりと
- ウ おおげさに
- エ 軽々と

問2 一線 「私はすでに何かしら敵がい心を抱いて」とありますが、それはなぜですか。理由として最も適切なものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 青年の、長身でスポーツマンタイプという外見が、自分と違いすぎていやだったから。
- イ 青年は、大人の草野球チームの投手だったので、ずるいと思ったから。
- ウ この遊びには大きな景品がかかっているので、もっと真剣に取り組むべきだと思ったから。
- エ この遊びには「私」も自信があり、自信ありげな青年に負けたくないと思ったから。

問3 一線 「何とかチームの投手と呼ばれた青年もみじめに敗退した」とありますが、その原因を「私」はどのようなことにあると考えていますか。本文中のことはを使って、五十文字以内で答えなさい。

問4 一線 「小僧」と同じ人物を指すことはを、本文中から四つ抜き出しなさい。

問5 一線 「そこまで糸を張って、その糸の上をそつとボールを送ってやった」とありますが、この表現から、最後の一球はどのように投げたことがわかりますか。あてはまらないものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 力を抜いて
- イ 集中して
- ウ 注意深く
- エ つわの空で

問6 本文中の□に適する語を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア とてもかつこいい
- イ すこしおどけた
- ウ いささかみつももない
- エ はなはだいさましい

問7 一線 「奇跡に近い成果」とありますが、具体的にはどうしたことを指しますか。本文中から二十五文字以内で抜き出しなさい。

問8 一線 「栄誉と栄光に包まれた人生最高の日」とありますが、筆者は、本文中のどの場面に対してそう感じているのですか。二十五文字以内で抜き出しなさい。

問9 次の□の四字熟語には誤字が一字ずつあります。正しく全体を書き直しなさい。

- 異句同音
- 心気一転
- 絶対絶命
- 意心伝心
- 五里夢中
- 夢我夢中

問10 次の□の文の□に適する、色を表す漢字一字を答えなさい。

将来にむけての□写真をつくる。
「俺の目の□いつかは勝手にさせん」と父は言った。
彼女は、科学の世界に□字塔を打ち立てた。
「隣の花は□い」と、人はよく感じてしまつた。
